

逆風に気を吐く

医学部や歯学部など大学の医系学部にてターゲットを絞った専門予備校の「メディカルラボ」と待機児童の解消に一役買おうと保育園事業を手がける「済聖会」。2つの事業を主宰するのは株式会社キョーイクの宮川幹生社長である。少子化という厳しい環境の中で事業は躍進を続けている。原動力は「一流」と「切実」。外から見えない2つのキーワードがキョーイク社を支えている。

「一流」へのこだわり

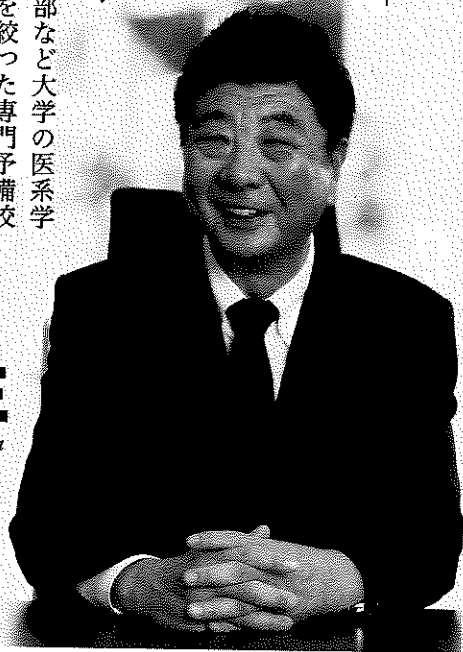
人が頼りの教育事業だが経営環境は決して恵まれたものではない。内閣府

指導の中身は限りなく濃い。医学部や歯学部への合格実績も2016年度は715名に達し、他の医系専門予備校を圧倒している。

大名古屋ビルヂングへの再転居

一流の真骨頂は校舎だろう。校舎は全国に22校あるが、ほとんどが中心街に位置する高層のインテリジェントビルの中にある。極め付けは本部がある名古屋だ。昨年、転居したばかりの名古屋ビルディングの向かいに、大名古屋ビルヂングが竣工した。宮川は躊躇なくここに教室の大半を再移転したのである。

「コストがかかりすぎる」と猛反対するスタッフを押し切って強行した再転居は、見方によっては無謀とも言える。だが、宮川は名古屋復興のシンボルともいべき大名古屋ビルヂングへの入居にこだわった。一流の医師の卵を、伊勢湾台風の復興の中心となったこのビルで学ばせたかったのである。



宮川幹生
Mikio Miyagawa

株式会社キョーイク
代表取締役社長

医学系予備校界の トップランナー

「一流」と「切実」で道を切り開く、キョーイク社

のデータによると予備校の経営資源ともいべき18歳人口は、平成4年度に205万人と直近のピークをつけたあと減少を続け、26年度には118万人とほぼ半減した。適齢人口の減少はいまも続いている。予備校に限らず大学経営はどこもかしこも青息吐息と言っている。

そんな逆境の中で気を吐くのがキョーイク社だ。主宰者の宮川は悪化する外部環境に背を向けるかのよう「一流」にこだわり続けている。医系専門予備校は将来の医師を養成する第一ステップである。「医師とは命に向き合う仕事、私たちはそんな人材を育てるためにあらゆる知見を注ぎます」

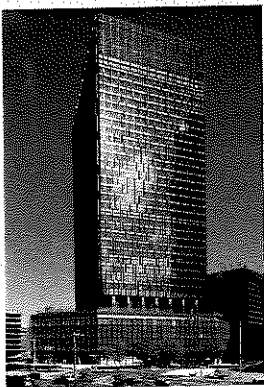
宮川とメディカルラボのスタッフは、「一流の医師を育てたい」との思いを共有している。そのために労を惜しまない。予備校として初めて生徒一人に講師を一人つけるという、完全対形式の個別授業をスタートさせた。講師も全てプロである。英語や数学といった学科はもちろんな、面接や小論文まで

の思いもまた切実である。メディカルラボは「ひとりひとりの夢と真剣に向き合いその夢を実現する。これがメディカルラボの約束です」と生徒や親に宣誓する。

「切実」な保育事業にも参入

待機児童問題に揺れる保育事業にも、親の切実な願いに応えたいとの宮川の思いが息づいている。すでに6ヶ所での保育事業は始まっているが、今年から本格的に全国展開する。働く若い親にとって保育所の確保はなにもものにも勝る身近で切実な問題である。教育事業者として宮川はここにも静かに関心を寄せている。

「将来的には海外でも教育事業を展開したい」と宮川は自らの夢を語る。少子化で国内のフロンティアは縮小していく。実業家としてグローバルな展開を考えるのは当然だろう。どんな未来が待ち受けようと、キョーイク社は「一流」と「切実」で道を切り拓いていく。



大名古屋ビルヂング